

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

## 第二百六十九回 木村徳太郎先生のこと

南出喜久治（令和7年6月1日記す）

教育勅語が渙発されたときの明治天皇の御製に、

いかならむ ときにあふとも 人はみな 誠の道を ふめとをしへよ

があります。

明治天皇は、心の歌をよく詠まれました。

「いかならむ ことにあひても たわまぬは わがしきしまの やまとだましひ」（如何ならむ事に遭ひても撓まぬは我がしきまの大和魂）。

「しきしまの大和心のををしさはことある時ぞあらはれにける」（敷島の大和心の雄々しさは、事ある時とぞ顕はれにける）

などがあります。

このことを心底から理解されてゐたのが、木村徳太郎先生でした。

私は、「占領憲法の正體」の序文に、木村徳太郎先生のお名前を挙げました。それ以外にも三澤貫一郎先生、表権七先生、相原良一先生、ジョージ・L・ウエスト博士、清水澄博士のお名前を掲げましたが、どうしてこれらの方々のお名前を書いたのかについて、これまであまり説明してゐませんでした。

ここでは、木村先生のことについて説明したいと思ひます。

一言で言へば、木村先生は、私が祭祀の道を歩む切つ掛けを得るご縁をいただいた恩人です。

木村先生は、「明治天皇さま」、「日の丸と天皇さま」などの著作を表してをられる。

大津のご自宅に何度がお伺ひして、いろいろなお話を聞かせていただいた。

木村先生は、父の遺言で教育勅語の復活のために孤軍奮闘して活動してゐる私を勇気づけ、真正護憲論を熱烈に支持していただいた。

何度のご自宅をお伺ひしたときに、木村徳太郎先生と永井明との教育勅語論争（昭和30年

10月～32年2月、児童文学研究誌「お話の木」に掲載）の話を聞いたことがあります。

永井明が「教育勅語と君が代は、日本の一番悪い象徴だ。」と語ったことに対し、木村先生はこれに猛然と反論され、「天皇賛美ではない。天皇欽仰である。恋闕である。」との天皇観を述べられ、子供たちに解りやすいやうに祭祀の道について次のやうに語りかけられ、「お話の木」に掲載されました。

「君にはお父さんお母さんがおられるだろう。だから君がいるのだ。君がいることは、お父さんお母さんがあったと言う事だ。両親がおられた事は、おじいさんおばあさんがあったと言う事の事実だろう。おじいさんのそのまたおじいさん……。三十代ほどさかのぼってみよ。日本人はみな兄弟姉妹の肉親になってしまう。この中に、ずっと一本とおっておられるのが天皇様だ。われわれの親であり、本家の主である。」

そして、木村先生は、私に、大早（たいかん）に雲霓（うんげい）を望むが如く天皇を恋慕し、「人は武士。気概は高山彦九郎。京の三条の橋の上、落つる涙は鴨の水」などの感慨を私に述べられた。

私が食事の前後に、柏手を一拍するのは、木村先生が神職を務められてみたときからの習慣であり、私もこれを見習って実践することにしました。木村先生の感謝の気持ちも込めて、いまでもこれを習慣として続けてみます。

私が柏手を一拍するのは、食事のときと入浴（沐浴）のときです。食べ物の恵みへの感謝、穢れを引き受けてくれる水への感謝です。

ところで、木村先生の「日の丸と天皇さま」の中で、こんなくだりがあり、そのお話を直接にしてもらひました。

「二・二六事件の青年将校の諸君が、昭和十一年七月に処刑された。同年八月の新盆に、天皇様は宮中に於いて、処刑された青年将校の数だけの盆提灯を供養の意味でともされて、その事の意味を仰せにならず、ひそかに祀られた。」（文藝春秋「宮中の秘話」）と書かれてゐます。

これを知った私は、クーデター研究から出発して到達した真正護憲論を完成する経緯の中で、天皇を戴く我が国の誇りを強く噛みしめたのです。

木村先生には、深甚なる感謝と敬意の気持ちをいつまでも持ち続けてみます。

